



公益財団法人

国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM

国際文化フォーラム通信

2013年1月

no. 97

〈考える〉を刺激する



●考え方や生き方に着目し、その人の視点を掘り下げることが、読み手の〈考える〉を刺激する。そう信じて、日本情報発信サイト「くりっくにっぽん」は生まれ変わりました。●新しい試みのひとつとして、2012年度明治大学国際日本学部のゼミと連携し、「くりっくにっぽん」のコンテンツづくりに取り組みました。●今号は、新しい「くりっくにっぽん」を紹介し、ゼミでの1年を追ったルポルタージュを掲載します。

【特集】

〈考える〉を刺激する……………2

- 「人」に迫る
- コンテンツをつくる
 - 教室と社会をつなぐ
- 「とことん考え抜く」にみんなで挑む
- 「くりっくにっぽん」の挑戦

TJFニュース……………10

- TJFの事業を支えてくださる皆さま
- TJFコラボレーターが活躍
- 「知り合いマップ」ができた！
- ……………ほか

掲示板……………16

「人」に迫る

日本情報発信ウェブサイト「くりっくにっぽん」を、「人」を前面に打ち出し大きくリニューアルしました。

「My Way Your Way」コーナーでは、いま日本で話題になっているテーマを取り上げ、そのテーマに関わる人たちがなぜ“はまった”のか、きっかけは何だったのかなど心の裡について語ります。

「1/365(365分の1)」コーナーでは、日本の高校生・大学生レポーターが「お月見」や「ひな祭り」などの伝統行事を新しい世代としてどのように行っているのか、自分にとっての記念日はどんなものがあってどういうふうに過ごしているのか、それぞれの生活の様子をつづります。

「何コレ?マジコレ!」コーナーでは、旅行や留学で日本にやってきた海外の中高校生や大学生が発見した「日本」、私たちにあって当たり前のものがなぜ新鮮な発見と映るのかを写真とキャプションで紹介しします。

「モノ」から「人」へ

これまで「くりっくにっぽん」では、若い人たちが関心をもっている日本の情報をモノを中心に発信してきました。しかし、いまやそうした情報はちまたにあふれています。世界から注目されているポップカルチャーなど“Cool Japan”の情報も、インターネットですぐさま入手できるようになりました。そこで、モノよりも、人に焦点をあてていくことにしました。

サイトのリニューアルにあたって、私たちがもっとも重視したのは、「くりっくにっぽん」の記事を読んだ人たちの考えが深まり、新しい世界に一步を踏み出すきっかけとなることです。

人と出会い、その人の思考や思いなど心の裡を知ることこそが、何よりも人の心を動かし、「考える」を刺激し、行動を引き出すのだらうと思います。だから、「くりっくにっぽん」は、さまざまな出会いを提供します。

「My Way Your Way」コーナーに、「ファッションで自己表現」と題した特集を掲載しました。独自のファッションを追求する20代女性へのインタビューと、“なんちゃって制服”を売り出す社長、都内の高校に通うJK(女子高生)4人が登場しています。年齢も立場も異なる人びとがファッションを通じて、自分の考えや生き方を述べています。

ある人にとって学校の制服は「管理の象徴」であり、ある人にとっては「高校生のかわいらしさをアピールできるもの」です。また、顔を白く塗り、奇抜なメイクとファッション

に身を包む人は、「白塗り」は自分にとってはアートであり、自分の好きな世界を表現するものだ」といいます。なぜそう考えるのか、きっかけは何か、その思考のプロセスに迫ります。

「1/365」コーナーでは、「自分はクリスマスといえばケーキをすぐに連想するけれど、世代によって違いはあるのだろうか」と思いついた高校生が、自分と同世代、お父さんお母さんの世代、おじいちゃんおばあちゃんの世代にそれぞれインタビューして、世代によって変わらないこと、違うこと、考えたことをレポートしています。

一人ひとりの物語

人は誰もが物語をもっています。なぜその物語を紡ぐのか、どんな出会いがあり、どのようなできごとで遭遇したのか。何を感じ、どうやって生きているのか。一人ひとりの語りに耳を傾けることで、「人」から切り離されることなくさまざまな文化が浮かび上がってきます。日本人にこだわらず、日本に関わる人たちに聞いていきます。

人に迫って「考える」を刺激する、その大きな流れのひとつとしてチャレンジしたのが、明治大学国際日本学部2年横田ゼミとの連携です。



先生コーナー：21世紀を生きる力を生徒に身につけさせたいと思う教師がどんな取り組みをしているのかをつづるエッセイ「めいきんぐ★授業」コーナーや、「くりっくにっぽん」のコンテンツを使った授業案を紹介する「くりっくにっぽん活用術」などがある。



vol.3 ファッションで自己表現
Seifukuを世界へ!

学校に制服がなくとも、「なんちゃって制服」ブームの仕掛けは、高校時代に制服の廃止を提案して「服」をいま作っているのか。



vol.2 ファッションで自己表現
高校生リアルトーク
分が上がる!

東京都内の高校に通う4人。みんなそれぞれが、毎月いくらかの使い道、おもしろいもの、本音を聞いた。



vol.1 ファッションで自己表現
「白塗り」で描くマイ

顔を白く塗って独自のファッションを追求する野氏。「白塗り」で描く世界は何かを語

myway yourway



制服で通学する高校生は、掛け人といわれる相満さんという。それがなぜ「制

2012.10.22

myway yourway



おしゃれをすると気

れ、それファッションには興味し、それに対してどんな考えを

2012.10.22

myway yourway



ワールド

る「白塗り」にはまっている津

2012.10.22

編集部log



くろくにっぽんに登場予定の高校生、NHKの番組に出演

2012.11.30

1/365



夏休み
夏宿

2012.08.20

何これ?マジコレ!



「ウェスタンフード」って?!

2012.10.23

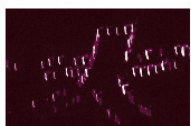
1/365



お月見
お月見スイーツ

2012.10.05

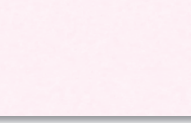
1/365



お盆
家族旅行

2012.08.30

1/365



お盆
家族旅行

2012.08.30

1/365



運動会
秋のスポーツ大会

2012.11.27

1/365



ゴールデンウィーク
築地歩き日記

2012.05.10

編集部log



「くろくにっぽん」日本語版、リニューアルオープン!

2012.10.17

1/365



文化祭
文化祭

2012.10.01

1/365



夏休み
最近の浴衣は...

2012.08.24

1/365



夏休み
最近の浴衣は...

2012.08.24



Click Nippon

★ 日本語
English
汉语

Google カスタム 検索

myway yourway

1/365

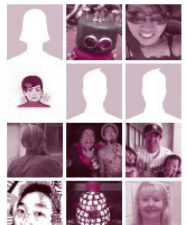
何これ?マジコレ!

編集部log

Facebookもチェック



あなたと他32人がClickNipponについて「いいね!」をしています。



RSS

先生コーナー

くろくにっぽんのコンテンツを日本語や日本理解の授業で活用するためのヒントを提供します。

- めいきんぐ授業
- くろくにっぽん活用術
- アーカイブ
- 先生向けメルマガ

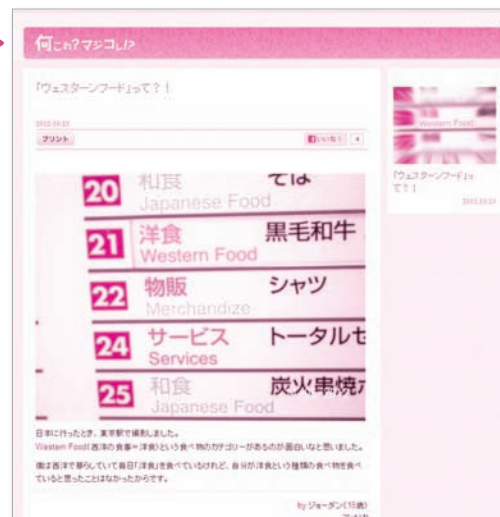
このサイトについて
サイトポリシー
サイトマップ



My Way Your Way



1/365



何コレ?マジコレ!?

授業での活用

コンテンツをつくる

「2年生のゼミで、日本の紹介をTJFといっしょにできないだろうか」横田雅弘明治大学教授に声をかけていただいたのは2011年秋のことです。新しい「くりっくにっぽん」について侃々諤々議論し、「人」を前面に出し、新しく作るコーナーでは人の考えるプロセスを提示しようと話をしていたところでした。「くりっくにっぽん」の記事が「考える」を刺激するのであれば、記事をつくることも「考える」を刺

激するはずです。

10人の学生が「My Way Your Way」コーナーのコンテンツをつくることを最終目標に、横田教授と共同でカリキュラムづくりが始まりました。「くりっくにっぽん」の根底にある考え方をカリキュラムに織り込みながら、学生といっしょに走り出したのです。

この1年間の横田ゼミの取り組みをレポートします。

特集Ⅱ「考える」を刺激する

1年を振り返る

課題① 仲間を紹介:2人1組になって、2～3枚の写真と短い文章で相手を紹介。同じシチュエーションで撮影するのは禁じ手に。

授業中のうたた寝やら、バイト先に潜入して撮った写真、いろんなシーンを撮ったなあ。とりわけすっぴんの写真はすごい!

課題② モノを紹介:海外で日本語を学ぶ高校生に紹介したい身近なおもしろいモノ・事象を写真と文章で紹介。日本に興味はあるけれどあまりよく知らない高校生が関心をもつようなものを紹介すること。

学生が撮ってきたもの:高校生の放課後の過ごし方、お化粧品、お風呂、制服、街並み、キャラクターグッズ…。友だち3人の家の冷蔵庫の中を撮った人も…。その発想、すばらしい!

写真ワークショップ:写真の撮り方、基本的なアングル、簡単な画像修整の仕方などについてTJFが説明。その後、一人ひとりが撮ってきた写真の構図についてディスカッション。

同じものを違う角度から撮ったり、トリミングしたりしたものを見て「え～、全然違う!」と学生たちはびっくり!

課題③ 紹介したい「日本」をいろいろな角度で切り取り、写真と文章で1枚にまとめる。取り上げる「日本」は、人でもいいし、モノでもかまわない。

学生が取り上げたもの:縁起のいいこと・悪いこと、妹の美容生活、食品サンプルの技術、デパ地下の試食コーナー…。一つのトピックをいろいろな面から捉える作品が多くなった!

聞き書きワークショップ:講師は『木のいのち木のころ』など著作多数の作家・塩野米松氏。聞き書きとは、インタビューした内容を相手のことばだけで文章にまとめていく手法。どのような質問をするのか、原稿はどうやってまとめていったらいいのかなど、取材するときのポイントについて話を聞いた。

紙すき職人、鼈甲加工職人、八百屋さん、旅の本屋さん、ケアマネジャー、教師、獣医…いろいろな職業の人の聞き書きが集まった。

課題④ 各自、どんな職業の人に話を聞くのかを決めて、取材を申し込み、1～2時間、インタビューを行った。インタビューを一字一句書き起こした後、自分の質問をすべて消し、相手のことばだけで10,000字にまとめる。

アルバイト先のカフェでコーヒーをいれるバリスタに話を聞いた学生は、「熱い思いでコーヒーをいれていることがわかって感動!」。アメリカで美容師をやっている叔母に聞き書きした学生は、「苦勞したこといっぱいあったのにhappyと笑顔でいう叔母をもてて幸せ!」

プレゼンワークショップ:電通CMプランナー・近藤祐見氏から、CMの発注から制作までの流れ、プレゼンテーション(プレゼン)とは何かについて話を聞き、実際のプレゼンも見せてもらった。

“ホンモノ”のプレゼンを見て学生の目はキラキラ。

課題⑤ くりっくにっぽん「My Way Your Way」のコンテンツを各自で企画、プレゼン。コンペの結果、2本の企画が採用された。(詳細は6～8ページ)。

自分もプレゼンをがんばろう!という意気込みがひしひしと伝わってくる。

課題⑥ 2グループに分かれて、採用された2本のコンテンツをつくる。

教室と社会をつなぐ

横田雅弘

明治大学国際日本学部教授



TJFと連携したらおもしろいだろう。そう思ったのは、「日本の高校生フォトメッセージコンテスト」を知ったときで、今から10年以上も前のことです。同じ高校生の目線から、そして友だちだからこそ撮れるありのままの姿を写真とメッセージに託して、世界の日本語教師や同世代の若者に向けて発信する作品が集まっていました。そこには、「日本とはこれですよ」といった押しつけがましさがありません。写真の背後には、友だちの優しい眼と鋭い観察眼があり、見るものを強くひきつけるすばらしい「日本の紹介」だと思いました。そこには軽々と文化の違いを超えて共感を呼ぶ人間の姿があったと同時に、そのディテールからは日本の高校生の生活がさりげなく、しかも豊かに伝えられています。

5年前に明治大学国際日本学部に移籍したとき、私はこの学部のミッションである「日本のおもしろさを再発見して世界に伝える」ことに、TJFと連携して挑戦したいと思いました。私はこの挑戦に二つの期待を抱いたのです。

一つは、学生が日本に関する情報を世界に発信する、一筋縄ではいかない作業に取り組むなかで、自らのステレオタイプに気づき、発信することの難しさを実感するだろうという期待です。「くりっくにっぽん」の新しい軸である“人を通して日本を伝える”では、「なんちゃって制服」の仕掛け人や白塗りで原宿を歩く女性が登場しますが、彼らは日本を紹介しようと思って語っているわけではありません。その人たちを紹介することが日本を紹介することになるとは必ずしもいえません。しかし、事実として、ここ日本にこのように自分を表現しようとしている人が、確かにいる。その人たちの生き方を丁寧に描写していけば、その行間に日本の今、そして過去が垣間見えてきます。私は、国際日本学部のコンセプトもこのTJFの方向性に近いものだと思っています。日本はいつもその内部で変化しているのですから、これが日本ですよと教え込むようなこと

は、分析によって抽出された過去の枠組みを紹介するにすぎません。その枠組みを理解することに価値がないわけではありませんし、枠組みから完全に逃れることもできませんが、「人」が懸命にあることに打ち込んで、個性を輝かせている姿から直接日本を感じ取ることを大切にしたいと思います。そして、それこそTJFがやろうとしていることであり、私がゼミの学生に学んでほしいと思っていることなのです。

二つめは、TJFとの連携を通じて、学生がリアルな社会につながる経験をつむことができるのではないかという期待です。善し悪しは別として、多くの課題に取り組ませない日本の大学で、大学という守られた社会の中だけにいては大きく成長できません。私は10年前に「まちづくり」の授業を開講し、学生と一緒に実際に地元のまちづくりに参加してきましたが、これは教室から社会への入り口をつくる作業です。そこに参加した学生には、大学の門を出て、現実の社会に踏み出す経験をしてほしいと願っています。大学生も社会を担う一員ですから、真剣に社会と対峙する必要も責任もあります。

ゼミナールの学生たちは、TJFから「仕事の発注」を受けて、「くりっくにっぽん」のコンテンツ制作に取り組んでいます。そのなかで学生たちは、この仕事の意味を理解し、意義に共感し、いかにすればそのコンテンツを世界の若者の心に届けることができるかと考えています。多くのダメ出しを受け、その度に企画の出発点に戻って考え直し、時に歯を食いしばり、泣きそうになり、かと思えば、あっけらかんと笑って壁を乗り越えていく。学生が頼もしく思えることが多くなりました。

ゼミナールで発することばや「仕事」に臨む姿から、学生の成長に手ごたえを感じています。学生が懸命につくった「くりっくにっぽん」のコンテンツが多くの人の心に届くことを願っています。



「あっ、これでスジが通るよね?!」「そういうことなのか!」「やったあ!」パチパチパチ……

教室の片隅で顔を寄せ合い、これから書く記事のテーマについて粘り強く議論を続けていた5人の学生から、興奮と安堵の声があがりました。このまま話し合いを続けて答えが出せるのだろうかと思途方に暮れる気持ちや、諦めもわいてくるなかで、何時間にもわたり、不安をこらえてみんなで考え抜いた、その先に光が見えた瞬間でした。

どんなテーマで日本を紹介したいのか、構成はどうするか、誰に取材するのかなど、5人ずつ2班に分かれて、「くりっくにっぽん」コンテンツづくりの課題に挑戦した学生たちにとって、頭が痛くなるくらい考え抜き、議論をする初めての体験でした。

■ Week1

「人」に迫って日本を伝える

年度当初、学生たちは日本を紹介するといえば「京都・伝統・和」といった固定観念をもっていました。「外国の人に日本を伝えることを考えるのは初めて」という学生もいました。前半の準備を経て、10月初旬に、いよいよ企画に取り組み始めました。

「My Way Your Way」コーナーの趣旨とコンテンツの構成につい

企画から取材へ

「とことん考え抜く」に みんなで挑む

てTJFからオリエンテーションします。そして2週間後に、10人がそれぞれひとつずつ企画案をプレゼンして、コンペを行うことにしました。プレゼンでは、「いまの日本の一端を紹介する話題を一つ取り上げ、そのことにはまっている人を3人提案する」ことがルールです。

■ Week2

自分ならではの問いに出会う

いざ日本社会のどんな事象をテーマに取り上げるか考え始めると、「海外では日本のアニメが人気だよな?」「日本の学校生活とか興味あるかな?」、次々アイデアがわく学生もいれば、手も思考も止まってしまう学生もいました。

思いつきを企画の形にするのはさらに難しく、小人数のグループに分かれてTJFのスタッフがサポートに入りました。学生は、感受性も強く発想力のポテンシャルもとても高そうなのに、「自問自答しながら物事を考える」営みの手前で、なぜか二言目には「わからない……」「いや、なんとなくそう思っ」「やっぱり違いますよね」と自ら思考を停止し、まるで厚い扉の前に立ち尽くすように足を止めてしまう場面が多くありました。

それでも、スタッフが一人ひとりの学生に向かい合い、問いかけ、

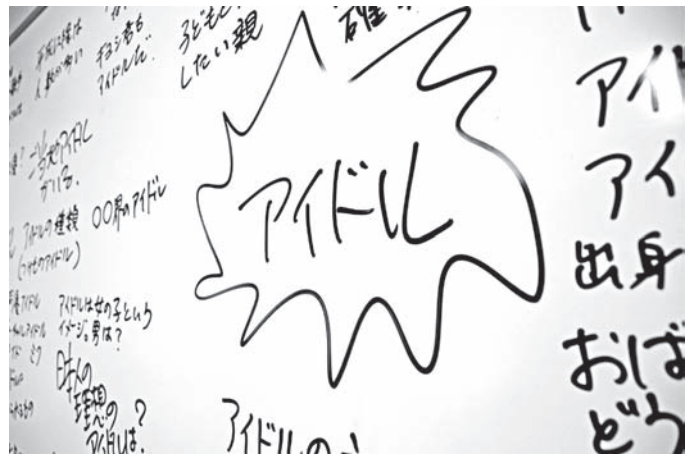
耳を傾け、丁寧に思考に伴走していくと、彼らが自分で自分に出会う、まぶしいような瞬間が訪れることができました。「そうか、これでホントに私ならではの切り口なんですね!」

■ Week3

本気でプレゼンする

〈一生懸命に練り上げた、私ならではの企画。選ばれたら、TJFのプロのライターと取材に行けるし、ゼミのみんなと一緒に、私の推したテーマで記者デビュー!〉

企画のコンペに向けて、学生の本気度をいやがうえにも高めたのは、株式会社電通のCMプランナー、近藤祐見氏によるプレゼンテーションワークショップでした。魅力的なプレゼンテーションの方法を学ぶのはもちろん、近藤さんがCMを企画して依頼主に提案する様子など、ワクワクする現場の話を聞き、さらに学生自身も実際に



競い合う形でプレゼンをして講評を受けることができるという、願ってもない機会に恵まれました。学生の感想のひとつに「以前、別の授業でプレゼンの実習をしたときと違って、今回は絶対に自分の企画の良さを伝えたかったから、どうしたら見る人が面白がってくれるか考えて工夫しました」とありました。何としても伝えたいことがあるからプレゼンをする、という近藤さんの仕掛けが学生のやる気を高め、コンペでは、横田教授が「ものすごい成長ぶり。こんな姿を見たことがない」と驚きを隠せないほど、全員が堂々と企画案を発表しました。実現したい企画がいくつもありましたが、取材期間などの制約を勘案し「デコでカワイイ文化を知る」と「アイドルの力」の二つが採用されました。

「デコでカワイイ文化を知る」は、身の回りの小道具、例えば携帯電話やペンなどをキラキラ光るビーズやかわいらしいパーツなどで飾る(=デコ)ことが流行しているが、この文化を通して日本女性が「カワイイ」に抱くこだわりを探るという企画です。もう一つ「アイドルの力」は、自分はアイドルには興味がないが、アイドルが好きな人はどこにひかれるのかという疑問から出発し、アイドルから日本の独特な好みや文化、社会の仕組みも見えてくるのではないかというものでした。

■ Week4~6

「わからなさ」の不安に耐え抜く

採用された企画は着想は良いものの、取材に取りかかるにはまだ練り直しが必要でした。そこで横田教授はKJ法を参考にしたブレインストーミングを導入し、学生たちの「知っているつもり」「わかっているつもり」に揺さぶりをかけていきました。

さらに、5人ずつ「デコ」班と「アイドル」班に分かれて議論を続けました。「このテーマを取り上げることで、読者にどんなことを感じたり考えたりしてほしいのか」「そのためにはどんな人物へのインタビューを組み合わせれば効果的か」というTJFのスタッフからの問いかけに、最初はワイワイと楽しく進めていた議論も次第に混沌とし、着地点が見えなくなっていきました。「話し合ううちに、『デコ』といってもいろいろあるということに気づかされました。多くのものを含むことばであるだけに、何を軸にして紹介するか決めるのが大変でした。議論していて、ひとつの案が出たと思うとまた振り出しに戻ることの連続で、とても辛かった」とあります。

この混沌こそがアイデアの源であり、耐える価値のある「わからなさ」なのだと何とか学生たちに感じてもらいたいと念じつつ、スタッフもときに議論の輪に入っていました。いつしか「わからない」「難しい」が減り、一歩踏み込んだ良い問いかけを学生同士がしあうようになっていきました。

「あっ、これでスジが通るよね!!」「そういうことなのか!」「やったあ!」パチパチパチ……

冒頭で紹介した拍手と歓声が「デコ」班からあがったのは、そんな、手ごたえを感じ始めたなかでのことです。「デコの流行」という社会事象にどう光を当てるか、納得のいく答えにたどりついた学生たちの顔は、「自分たちなりの発見」をした喜びと、そこまで考え抜いた達成感で輝いていました。

■ Week7~10

インタビューの重みを実感する

「デコ」班と「アイドル」班それぞれが3本ずつインタビュー記事を書くことになり、合計6件の取材手配が同時進行で始まることになりました。取材を申し込み、日時の約束を取り、相手について下調べする。社会に出る前の学生たちにとっては初めてのことばかりで、報告・連絡・相談の仕方から日時の決め方、事前調査のやりかたまで、戸惑いの連続でした。

取材にはスタッフが交代で同行しましたが、学生一人ひとりが、取材相手に真摯に向き合い、多くのことを吸収していく姿に励まされました。インタビューを受ける方々も、そんな彼らに心を開いてくださったのか、率直に人生の一端を見せてくれる場面もありました。その姿に心を打たれたある学生は、お礼状に「私たちが責任をもって、いい記事に仕上げたいと思います」と書きました。インタビューを記事にするのは、いわば話を聞かせてくださった方の人生を預かることです。そのことの重みを感じとったからこそ、自然に出たことばだったのでしょう。



「くりっくにっぽん」の挑戦

つながっていくと思います。

「日本」を切り口に、さまざまな人を紹介することで、その背景に「日本」がぼんやりと浮かび

「My Way Your Way」に登場する人は有名人であるかどうかは関係ありません。取り上げた分野の第一人者とも限りません。しかし、その話題となることに“はまっている”人です。はまったきっかけや、はまる前と後では何が違うのか、といった思考のプロセスに焦点をあてています。人の思考を知ること、自分はどうかと考えることになるからです。

これは、「1/365」でも同じです。高校生と大学生が行事をどのように過ごしたのかをレポートしますが、何をした、という一行日記のようなきもあれば、その行事について調べてみたり考えてみたりしてレポートするときもあります。

人の内面を伝え、思考プロセスを提示することは、国や文化の違いを超えて、人が考え、次の何らかの行動に一步を踏み出すことに

上がってきます。いま日本で暮らしている人びとを知ること、粹にはめた「日本」ではなく、変化を続ける「日本」のさまざまな面を感じてもらいたいのです。

こうした考え方がどう受け止められるのか、共感が得られるのか。「日本のおもしろさを再発見して世界に伝える」ことをミッションとする明治大学国際日本学部の横田ゼミと連携することで、どんな反応があるのか立ち会えると思いました。果たして、ゼミの学生10人は、「人」に迫り、さまざまな「日本」に出会っています。「考える」が刺激された10人の記事が、今度は読んだ人の「考える」を刺激するに違いありません。

「考える」をもっともっと刺激するために、「くりっくにっぽん」は発信し続けます。

明治大学横田ゼミ・TJFコラボ「My Way Your Way」コンテンツ

■「アイドルの力」(仮題)

- ・アイドルになった理由：茨城県下妻市を盛り上げるために活動する、ご当地アイドル「しもんchu」。メンバーは仕事や学業とかけもちしながら、週末はアイドルとしてステージに立つ。ファンと直接触れ合うことを大事にしたいと語る。
- ・ヲタ芸って何?: ヲタ芸をする人たちから「神」と崇められ、海外公演も行う「ギニュー特戦隊」。メンバーの一人、しゅんしゅんは大好きなアイドルを応援するためにヲタ芸を始めたが、ヲタ芸を極めたいという。
- ・アイドルを社会学する：明治大学国際日本学部でアイドル研究をする学生2人。アイドルとファンの関わり、アイドルの魅力を分析するうちに、アイドル好きになったという。



しもんchuのインタビューでは、5人のメンバーのうち3人に話を聞いた。

■「デコ」で気持ちを伝える(仮題)

- ・デコ弁に込める気持ち：子ども2人のため、折々にアニメのキャラクターなどをかたどったデコ弁をつくるお父さん。超多忙な日々のなか、どんな気持ちで手間と時間をかけているのか。
- ・スイーツデコが私と社会をつなぐ：セミプロ級の腕をもつ中学生。学校になじめなかった彼女はいまや自分でお店にも作品を売り込む。
- ・手作り文房具を広めたい：小学生のときから既製の文房具に一工夫を加えて使っていた宇田川一美さん。ワークショップを開いたり、本を出したりして、誰もが作れる一手間かけた文房具を広めたいと語る。



これらの記事は2月から3月にかけて「くりっくにっぽん」に順次掲載していきます。ぜひご覧ください。

▶www.tjf.or.jp/clicknippon

くりっくにっぽん

検索

競い合う形でプレゼンをして講評を受けることができるという、願ってもない機会に恵まれました。学生の感想のひとつに「以前、別の授業でプレゼンの実習をしたときと違って、今回は絶対に自分の企画の良さを伝えたかったから、どうしたら見る人が面白がってくれるか考えて工夫しました」とありました。何としても伝えたいことがあるからプレゼンをする、という近藤さんの仕掛けが学生のやる気を高め、コンペでは、横田教授が「ものすごい成長ぶり。こんな姿を見たことがない」と驚きを隠せないほど、全員が堂々と企画案を発表しました。実現したい企画がいくつもありましたが、取材期間などの制約を勘案し「デコでカワイイ文化を知る」と「アイドルの力」の二つが採用されました。

「デコでカワイイ文化を知る」は、身の回りの小道具、例えば携帯電話やペンなどをキラキラ光るビーズやかわいらしいパーツなどで飾る(=デコ)ことが流行しているが、この文化を通して日本女性が「カワイイ」に抱くこだわりを探るという企画です。もう一つ「アイドルの力」は、自分はアイドルには興味がないが、アイドルが好きな人はどこにひかれるのかという疑問から出発し、アイドルから日本の独特な好みや文化、社会の仕組みも見えてくるのではないかというものでした。

■ Week4~6

「わからなさ」の不安に耐え抜く

採用された企画は着想は良いものの、取材に取りかかるにはまだ練り直しが必要でした。そこで横田教授はKJ法を参考にしたブレインストーミングを導入し、学生たちの「知っているつもり」「わかっているつもり」に揺さぶりをかけていきました。

さらに、5人ずつ「デコ」班と「アイドル」班に分かれて議論を続けました。「このテーマを取り上げることで、読者にどんなことを感じたり考えたりしてほしいのか」「そのためにはどんな人物へのインタビューを組み合わせれば効果的か」というTJFのスタッフからの問いかけに、最初はワイワイと楽しく進めていた議論も次第に混沌とし、着地点が見えなくなっていきました。「話し合ううちに、『デコ』といってもいろいろあるということに気づかされました。多くのものを含むことばであるだけに、何を軸にして紹介するか決めるのが大変でした。議論していて、ひとつの案が出たと思うとまた振り出しに戻ることの連続で、とても辛かった」とあります。

この混沌こそがアイデアの源であり、耐える価値のある「わからなさ」なのだと何とか学生たちに感じてもらいたいと念じつつ、スタッフもときに議論の輪に入っていました。いつしか「わからない」「難しい」が減り、一步踏み込んだ良い問いかけを学生同士がしあうようになっていきました。

「あっ、これでスジが通るよね!!」「そういうことなのか!」「やったあ!」パチパチパチ……

冒頭で紹介した拍手と歓声が「デコ」班からあがったのは、そんな、手ごたえを感じ始めたなかでのことです。「デコの流行」という社会事象にどう光を当てるか、納得のいく答えにたどりついた学生たちの顔は、「自分たちなりの発見」をした喜びと、そこまで考え抜いた達成感で輝いていました。

■ Week7~10

インタビューの重みを実感する

「デコ」班と「アイドル」班それぞれが3本ずつインタビュー記事を書くことになり、合計6件の取材手配が同時進行で始まることになりました。取材を申し込み、日時の約束を取り、相手について下調べする。社会に出る前の学生たちにとっては初めてのことばかりで、報告・連絡・相談の仕方から日時の決め方、事前調査のやりかたまで、戸惑いの連続でした。

取材にはスタッフが交代で同行しましたが、学生一人ひとりが、取材相手に真摯に向き合い、多くのことを吸収していく姿に励まされました。インタビューを受ける方々も、そんな彼らに心を開いてくださったのか、率直に人生の一端を見せてくれる場面もありました。その姿に心を打たれたある学生は、お礼状に「私たちが責任をもって、いい記事に仕上げたいと思います」と書きました。インタビューを記事にするのは、いわば話を聞かせてくださった方の人生を預かることです。そのことの重みを感じとったからこそ、自然に出たことばだったのでしょう。



「くりっくにっぽん」の挑戦

つながっていくと思います。

「日本」を切り口に、さまざまな人を紹介することで、その背景に「日本」がぼんやりと浮かび

「My Way Your Way」に登場する人は有名人であるかどうかは関係ありません。取り上げた分野の第一人者とも限りません。しかし、その話題となることに“はまっている”人です。はまったきっかけや、はまる前と後では何が違うのか、といった思考のプロセスに焦点をあてています。人の思考を知ること、自分はどうだろうかと考えることになるからです。

これは、「1/365」でも同じです。高校生と大学生が行事をどのように過ごしたのかをレポートしますが、何をした、という一行日記のようなきもあれば、その行事について調べてみたり考えてみたりしてレポートするときもあります。

人の内面を伝え、思考プロセスを提示することは、国や文化の違いを超えて、人が考え、次の何らかの行動に一步を踏み出すことに

上がってきます。いま日本で暮らしている人びとを知ること、粹にはめた「日本」ではなく、変化を続ける「日本」のさまざまな面を感じてもらいたいのです。

こうした考え方がどう受け止められるのか、共感が得られるのか。「日本のおもしろさを再発見して世界に伝える」ことをミッションとする明治大学国際日本学部の横田ゼミと連携することで、どんな反応があるのか立ち会えると思いました。果たして、ゼミの学生10人は、「人」に迫り、さまざまな「日本」に出会っています。「考える」が刺激された10人の記事が、今度は読んだ人の「考える」を刺激するに違いありません。

「考える」をもっともっと刺激するために、「くりっくにっぽん」は発信し続けます。

明治大学横田ゼミ・TJF コラボ「My Way Your Way」コンテンツ

■「アイドルの力」(仮題)

- ・アイドルになった理由：茨城県下妻市を盛り上げるために活動する、ご当地アイドル「しもんchu」。メンバーは仕事や学業とかけもちしながら、週末はアイドルとしてステージに立つ。ファンと直接触れ合うことを大事にしたいと語る。
- ・ヲタ芸って何?: ヲタ芸をする人たちから「神」と崇められ、海外公演も行う「ギニュー特戦隊」。メンバーの一人、しゅんしゅんは大好きなアイドルを応援するためにヲタ芸を始めたが、ヲタ芸を極めたいという。
- ・アイドルを社会学する：明治大学国際日本学部でアイドル研究をする学生2人。アイドルとファンの関わり、アイドルの魅力を分析するうちに、アイドル好きになったという。



しもんchuのインタビューでは、5人のメンバーのうち3人に話を聞いた。

■「デコ」で気持ちを伝える(仮題)

- ・デコ弁に込める気持ち：子ども2人のため、折々にアニメのキャラクターなどをかたどったデコ弁をつくるお父さん。超多忙な日々のなか、どんな気持ちで手間と時間をかけているのか。
- ・スイーツデコが私と社会をつなぐ：セミプロ級の腕をもつ中学生。学校になじめなかった彼女はいまや自分でお店にも作品を売り込む。
- ・手作り文房具を広めたい：小学生のときから既製の文房具に一工夫を加えて使っていた宇田川一美さん。ワークショップを開いたり、本を出したりして、誰もが作れる一手間かけた文房具を広めたいと語る。



これらの記事は2月から3月にかけて「くりっくにっぽん」に順次掲載していきます。ぜひご覧ください。

▶www.tjf.or.jp/clicknippon

くりっくにっぽん

検索

お知らせ

■TJFの事業を支えてくださる皆さま

TJFは皆さまからのご協力・ご支援を仰いで事業を行っております。
10～12月に以下の方々から寄附をいただき、コラボレーターの登録がありました。

○一般寄附金

青山恭子様 奥泉香様 鈴木啓修様^{ひろのぶ} 千場由美子様^{ちば}
中野貞弘様 平田直子様 柳素子様 山崎順平様 ほかに1名

○コラボレーター

北見沙愛様^{さえ} 鈴木涼子様 高梨美緒様 原隆幸様
安田仁美様

鈴木涼子さんは、大学の交換留学プログラムで北京に留学してい

ます。「趣味は津軽三味線で、サークル活動も行っています。三味線などの楽器の体験指導や演奏、和服の着付けなどはお任せください」とメッセージをいただきました。また、10月に招聘した中国黒龍江省教育代表団の通訳として、コラボレーターの方が大活躍しました。活躍の様子は、下段レポートをご覧ください。(藤掛敏也)

▶www.tjf.or.jp/jp/collabo

TJFではコラボレーターを引き続き募集しています。ミッション達成をめざし、皆さまとゆるやかにつながっていきたくと思います。

▶www.facebook.com/TheJapanForum

TJFの公式facebookページもぜひご覧ください。facebookに登録しなくても、記事を読むことができます。気に入ったら、「いいね!」ボタンを押してください。

レポート

黒龍江省教育代表団を招聘

TJFコラボレーターが活躍!

TJFは、中国における日本語教育を促進するため、2010年度から東北三省(吉林省、黒龍江省、遼寧省)の教育代表団を招聘しています。日中関係が冷え込むなか、10月1日(月)～5日(金)、黒龍江省教育代表団5名を迎え、埼玉県教育局をはじめとする教育関係者との交流、学校訪問や観光・買い物を通じて、日本の教育ならびに日本への理解を深めてもらいました。代表団からは記念に「中日文

化的使者」と大書した、背丈ほどある旗をいただきました。「これからは、顔の見える関係のなかで、ともに両国の架け橋になっていこう」という強い意志と温かい友情の思いが込められているように感じられます。



教育代表団から贈られた旗。
左は張石煥氏・黒龍江省教育学院日本語教育指導主事。

■日本で学ぶ中国籍の高校生

今回の招聘プログラムでは、日本の高校で学ぶ中国籍の生徒や高校から中国語を学んでいる学生と交流することで、代表団に若者の声を受け止めてほしいと考え、さまざまな機会を設けました。

埼玉県立戸田翔陽高等学校では、中国籍の生徒と交流しました。ほとんどの中国籍の生徒は日本語を学ぶことなく中学生のときに来日したため、中国の高校生活を知らず、代表団は日本の高校生活を知りません。そのため日本と中国の高校生活の違いについて(授業は何時から何時までか、アルバイトをしている生徒はいるのか、学校にトランプやゲームを持ってきてもいいのかなど)情報を交換し合う楽しい交流になりました。また、交流会での様子を見て、「ふだんは無口で静かなのに、中国籍の生徒があんな笑顔で話すのを初めて見た」と述べていた先生もいました。中国からのお客様をもてなすホストとして活躍できたことは、大きな自信につながったことと思います。

■コラボレーターが通訳

最終日の自由行動で、代表団が希望したのは買い物です。TJFコラボレーターの安田仁美さん、高梨美緒さん、北見沙愛さんに通訳と買い物のお手伝いをお願いしました。3人とも、TJFが毎夏実施している「漢語橋：日本の高校生サマーキャンプ(通称：サマキャン)」の



「買い物に付き合ってくれて、ありがとう！」
北見さん(左)と記念撮影をする馮雅菲氏・
黒龍江省教育学会露日教学專業委員會秘書長。

参加経験者で、高校卒業後も中国語を学んでいます。しかし、中国語を使ってコミュニケーションする機会がなかなかないそうで、今回中国語のレベルアップのチャンスだと捉えて協力してくれました。代表団のメンバーは買い物だけでなく、「どうして中国語を学んでいるのか」「中国語を学んでみてどう思っているか」など、日本の若者に聞いてみたいと思っていた質問を直接尋ねることができました。「池袋までの往復交通費まで自己負担で、勉強したりアルバイトしたりする貴重な時間を私たちといっしょに過ごしてくれて本当に嬉しく思っている」「このような時期に、一生懸命中国語を勉強している学生さんたちと知り合い、いろいろな話ができて、とても充実した買い物の時間だった」「中国が好きで、中国へ留学したい、と言っていた。ぜひ、実現させてほしい。そして、ぜひハルビンに留学してほしい。ハルビンから応援しています!」と感謝と激励のメッセージが寄せられました。

北見さんから、次のようなメッセージが届きました。

今回5人の中国人の方と家電量販店、薬局、100円ショップなどで買い物をしました。メンバーの馮先生とふたりきりで買い物もしました。馮先生は日本語が話せないの、単語がわからないときは携帯、辞書を使ってひとつひとつ消化していきました。相手が少しでも日本語が話せると甘えてしまいますが、中国語だけの環境に置かれたことによって、現在の自分の力がわかりました。今回「伝わらない! わからない!」という思いをし、落ち込んだときもたくさんありましたが、これからの自分の目標が見えました。

招聘プログラムが、代表団の皆さんに充実した5日間を提供しただけでなく、代表団と交流した生徒・学生たちが、自信をもって新しい一步を踏み出すきっかけにもなったことをうれしく思っています。
(森本雄心)

日本語教師研修をハルビンで実施 「知り合いマップ」ができた!

10月26日(金)～28日(日)、黒龍江省教育学院と共催で、東北三省(吉林省、黒龍江省、遼寧省)で日本語を教える中国人の教師40名を対象とする研修を実施しました。

8月に大連で開催した同様の研修の模様を前号で紹介しましたが、ハルビンでも、在住日本人に日本語でインタビューし、その人物について発表する課題に取り組みました。この研修では、教師の日本語力や指導法の向上のみをめざすのではなく、ことばを学ぶことは人とつながることだという原点に立ち返り、彼らが自分の町に暮らす日本人との「つながり」を自ら掘り起こし、紡いでいくきっかけづくりもねらいました。その結果、「教室」「学校」の枠を超えた、ダイナミックなつながりが次々と生まれました。

異文化で奮闘している人たちにインタビュー

インタビューに応じてくださったのは日本語教師会や黒龍江省の日本商工会に所属している8名の方です。研修参加者は5名ずつ8グループに分かれて、皆さんから話を聞きました。

最終日の発表会では、自分たちが紹介する人物を表すキーワードとして「挑戦者」を挙げたグループがいくつもありました。また、どのグループも、心を開いてインタビューに応じてくれたことに非常に親しみを感じたようで、発表会は「素敵な人でした」「今度いっしょに食事に行きましょう」と、温かいメッセージであふれていました。

発表会には、インタビューを受けてくださった方々だけでなく、ほかの日本人の方々も朝早くから聞きに来てくれました。

自分たちがこの研修で体験したグループ活動を
生徒にも体験させたいと、多くの参加者が感想を述べた。



多くの方が「こんなにたくさんの先生が中高校生に日本語を教えているとは知らなかった」と驚き、「力になれることがあれば、いつでも声をかけてください」と心強いことばで激励してくれました。

実は、日本人どうしも初対面の方が多かったようで、ひとしきり名刺交換の輪ができ、そこにも新たなつながりが生まれました。

■ みんなで作った「知り合いマップ」

発表会の締めくくりとして、全員で「知り合いマップ」を作りました。東北三省と日本の地図を貼り出し、自分がどこから来たか、全員が地図に印を付けていきました。ハルビン市内から参加した先生、同じ黒龍江省でも何時間もバスに乗って来た先生、近隣の省や遠く北京から来た先生、そしてハルビン市内から駆けつけてくださった16名の日本人の方々。歴史が刻みこまれた地図の上に、こうして新たに自分たちの手で記した温かい「つながり」の輪とその広がりが、全員の目に焼きついたことでしょう。

こうしてハルビン在住の日本人と面識ができたことは、研修に参加した中国人の教師にとって大きなできごとでした。「生徒に日本語を使うチャンスをつくってあげたい」「自分も、もっと日本語で話して研鑽を積みたい」「せっかく日本語を学んだのだから、日本人と友だちになりたい」、心の片隅でそう思いつつ、これまでその機会を得られずにいたからです。

中国側の研修主催者も、「私はこの地域の日本語教育を統括していないながら、しかも以前はビジネスマンとしてのキャリアもありながら、日本商工会の会長さんにご挨拶をしていなかったとは!」と言い、早

知り合いマップ。出身地に付箋を貼った。

黒龍江省と友好関係にある新潟出身の人が多かった。



速、次の日に宴席を設けて会長と盃を交わしていました。

こうして始まった関係をこれから温め育てていくのは現地の方々です。皆さんがゆるやかに、しなやかにつながり続けていくことを願って、TJFも、日本にいる私たちだからこそ貢献できることをやっていきたいと思います。
(安藤まどか)

沖縄の高校生が台湾の高校生と交流

ガイドムービーづくりに チャレンジした3日間

TJFは、沖縄県立向陽高等学校の協力を得て、同校の国際文科中国語コース2年生(全17名)を対象に、生徒が中国語の授業と関連活動を通じてコミュニケーションとコラボレーションの力をつけることをめざした1年間のプロジェクトを実施しています。同校で中国語の授業を担当する城間真理子先生のほか、交流学习や情報教育の専門家をプロジェクトチームに迎え、年間計画や評価基準づくりからスタートしました。プロジェクトは台湾の高雄市立高雄高級工業職業学校(高校。以下、雄工)との交流を授業や活動の中心に据えており、とくに後半半年間はインターネットを使いながら写真作品や映像をつくる協同活動に本格的に取り組む計画です。これまでは、授業で自分や自分のまち、学校生活を紹介する中国語の表現を学んだあと、TV会議で雄工の生徒に自己紹介や学校生活を紹介したり、旅行に関する表現を学んだあと、グループに分かれて台湾から沖縄への観光プランをつくってプレゼンし、雄工の生徒にどのプランがいいか投票してもらうなど、さまざまな活動を行ってきました。また、

人に伝えることを意識したプレゼンテーションを考えるワークショップや、CMワークショップ(コンセプトと映像づくり)なども行いました。

■ いっしょに楽しみ、いっしょに泣く

10月18日(木)～21日(日)には、向陽高校から希望者10名が高雄を訪問し、雄工の生徒の家にホームステイしながら学校行事に参加したほか、3日間、午後の時間を使って協同活動に取り組みました。協同活動のゴールは、台湾に来られなかった向陽生に見せるために「旅行ガイドブックで紹介されない高雄の魅力を伝えるガイドムービー」をグループごとにつくりあげることです。

1日目は、雄工の生徒たちが取材先の案をいくつかプレゼンし、自分たちのテーマにできそうなものを話しあって取材先を選びました。向陽生は自分の意見を中国語で



も英語でもなかなか表現できず、だまりこむ姿も見られました。取材先が決まると、それぞれ電車やバスに乗って取材先の海辺や芸術地区に出かけていきました。城間先生と取材先をのぞきにいくと、高雄名物の大きなかき氷を食べたり、記念撮影をしたりと「観光」を楽しんでいる様子です。プログラムをつかった側としては、両校の生徒がいっしょに楽しく話をしている姿を見てうれしく思う反面、こんな調子で映像づくりは大丈夫かと不安もよぎります。記念写真だけで映像はつくれないのではと不安を口にする向陽生もいましたが、それを雄工の生徒に伝えるところまではいかないようでした。

2日目も午後から取材です。前の日の夕方にみんなでバスケットボールをしたり、街に夕飯を食べに行ったり、ホームステイをしたりしたこともあって、最初から互いに打ち解けた様子でにぎやかに出かけていきました。しかしこの日は、集合時間の17時30分を30分以上過ぎても1グループも学校に戻ってきませんでした。すべてのグループがそろったときには18時30分を過ぎており、雄工の先生方に、日の暮れた校庭で全員立ちっぱなしのまま30分以上中国語で叱られるはめになりました。雄工の生徒には「自分たちは向陽生のために一生懸命やっているのに」という思いもあったようで、途中でリーダー格の生徒が身体をふるわせ、涙を流しながら先生に反論するという緊迫したシーンもありました。お説教が終わったあと、雄工の生徒は泣きながら互いに励ましあったり、先生に謝りに行ったりしていました。向陽高校の生徒たちはその様子をもらい泣きしながら見守っていましたが、最後は彼らも入って全員で円陣を組み、「明日は絶対がんばろう!」と気合を入れていました。いっしょに叱られ、泣きながら気合を入れ直す経験をしたことで、仲間としての結束力がぐんと強まったように見えました。

■テーマへのこだわりを伝える

3日目の午後は映像のコンセプトづくりと制作です。グループごとにワークシートを使いながら、取材した場所や内容を書き出して分類し、テーマをしばらくこんで構成を考えました。実は、コンセプトづくりの段階で、「テーマを追求し、テーマにこだわって内容をつくる」という概念を雄工の生徒たちになかなか理解してもらえませんでした。何度も説明するのですが、どうしても自分たちが行った場所をつないだ「記念ムービー」の枠から抜け出せません。一方、向陽生はCMづくりワークショップなどで、テーマをどういうふ

うに考えていけばいいか、それを具体的にことばや写真でどう表現すればいいかを一通り体験していてイメージしやすかったのか、このままではいけないと考えている様子でした。そのうち、具体的な提案をするようになります。ある男子生徒は、「今のままだと、行ったところの羅列。『高雄の秋』みたいなテーマはどうか」と提案しました。「高雄は四季の差がほとんどないので秋はだめ」と却下されてしまいましたが、彼が具体的なテーマの例を示したことで雄工の生徒もイメージがつかめたらしく、話し合いの末、「高雄のビッグ」(高雄の大きいものに着目)というテーマにたどりつきました。また、あるグループでは、向陽生たちが、「自然がきれいなのが印象的だった。高雄の自然というテーマはどうか」と提案し、雄工の生徒も快諾しました。しかし、実際に作業にかかると、どうしても自分たちが撮った写真をつなぐところから抜け出せないようです。残り時間が少なくなり、雄工の生徒はコンピュータを使った映像制作作業に入っていましたが、向陽生たちは何とかテーマを深めようと自分たちの案を絵コンテに描いていました。「ことばではなかなか意図が伝わらないので、具体的に自分たちの案を描いて見せて、どう思うか意見を聞こう」と考えたそうです。雄工の生徒たちがすでに選んであった写真もいかしながら自然というテーマに迫るにはどんな構成にしたらいいか知恵をしぼっていました。向陽生たちは、言いたいことに中国語や英語の表現力が追い



最後に、つくりあげた作品をみんなの前で発表。映像効果や音楽にもこだわっていた。

つかなくてしょっちゅうことばにつまりながらも、ジェスチャーや絵を使っていきいきと自分たちの考えを相手に伝えていました。短い時間でしたが、すべてのグループが映像を完成させ、最後にみんなで上映することができました。

■ 相手の気持ちに伝えたい

帰国後、向陽生たちに感想を聞くと、「雄工の人たちが一生懸命、いっしょになにかをやろうしたり、わたしたちに伝えようとしてくれるのがうれしかった。自分もそれに伝えたい、ちゃんと伝えたいと思った。通じたときはうれしくて話すのが楽しくなった。相手が話しかけてくれたら答える受身なタイプだったけど、台湾の人の積極性や優しさを知って自分もがんばろうと思った。中国語を習っていてよかったし、台湾に行っていたよかった」など、雄工の生徒たちの積極性やあたたかさに触れて自分も安心して中国語を話そうと思えるようになった、積極的になれたというコメントが多くありました。また、「自分が中国語を話すとみんなが喜んでくれた。中国語は難しいけど、実際に使ってみると自分のなかに定着していくのがわかった」「通じないと悔しくてもっと中国語を話せるようになりたいと思った。その後の授業で、『あ！これ台湾で聞いた！』という単語があったりしてうれしくなる」など、ことばを使ってコミュニケーションすることの楽しさを実感し、ことばを学ぶ意味や目的に気づいた生徒も少なくありません。自分がグループに貢献してモノをつくりあげる達成感を味わった生徒もいます。ある女子生徒は、「途中までは全部相手にまかせっきりだったけど、自分たちと相手の考えていることが少し違って、『このままでいいのか？』と思って意見を出していった。作品の内容はまだただけど、協力してつくりあげることができてよかった」と感想を書いていました。今後は、インターネットやTV会議を使い、グループに分かれて互いの学校生活をいろいろな面から紹介する写真作品を交換し、その写真作品を使って2校の学校生活を物語仕立てで紹介する映像づくりに取り組みます。互いの顔も名前も人柄もよくわかった今、向陽生は雄工の生徒といっしょに活動するのを楽しみにしています。

(室中直美)

外国語教育を促進

広がる「めやす」への共感

『外国語学習のめやす2012』（以下、「めやす」）は発行以来、各方面から好評をいただき、さまざまなセミナーや研究会、学会などで取り上げられるようになりました。

11月24日(土)に早稲田大学早稲田キャンパスで開催された言

語文化教育学会第12回大会のシンポジウム『『わかる』から『できる・つながる』へ—外国語教育の未来—』でも、「めやす」が中心として取り上げられました。パネリストとして「めやす」開発メンバーでもある埼玉県立伊奈学園総合高等学校で中国語を担当する藤井達也氏と、筑波大学でフランス語を担当している小松祐子氏、ディスカッサントに国際大学教授の藤村泰司氏(日本語教育)と、早稲田大学教授の中野美知子氏(英語教育)が加わり、フロアも巻き込んで、外国語教育の未来について議論が交わされました。

■ 教室に社会を持ち込む

もっとも印象的だったのが、基調講演者でありディスカッサントでもあった中野美知子氏の「ことばは社会生活のなかで学ぶものであり、教場を社会にすることが、言語教育において重要である」というお話でした。早稲田大学は、1997年以来、情報化とともに英語教育の改革を進め、ネットワークを利用して、リアルタイムで他のアジアの学生(韓国、シンガポール、中国など)と英語でディスカッションできるシステムを構築しています。アジアの学生社会のなかで、学生が英語を使う場を提供することで、実践的運用能力や対話力を高め、異文化理解の促進を図り、グローバル人材を育成しようとする試みです。

「めやす」でも、言語は実際の社会活動を通じてもっとも効率的に獲得されると考えています。そこで、教室にリアルなコミュニケーションを持ち込むために、一連のコミュニケーション活動に文脈をもたせるとともに、教室外の事物や他教科の内容などと連繋させた授業設計を推奨しています。さらに、教育目標として、グローバル時代を生きぬく力を総合的に養成することを掲げています。これらは、早稲田大学の英語教育が志向している国際人としての資質涵養という目標や、実際の社会活動を通じての学習という言語獲得のプロセスと通底しており、「めやす」は英語教育とも共有することができることがわかり、勇気づけられました。

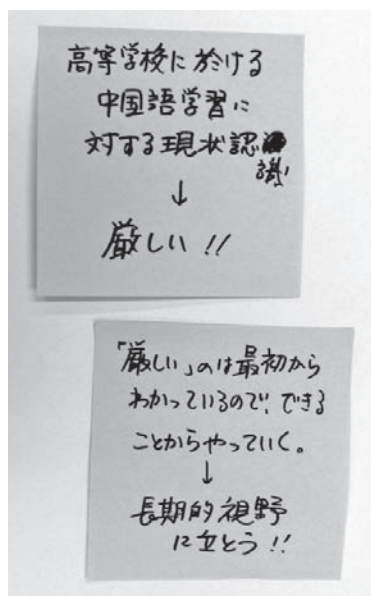
これまでに「めやす」約5,000部を中国語教育と韓国語教育の関係者を中心に配付してきました。しかし、外国語教育界全体からみると、まだその数はわずかです。もっと多くの方に使ってもらえるよう努力するとともに、「めやす」が、英語はもちろん日本語も含むあらゆる言語教育の発展の一助となり、複数の言語が学べる環境づくりに努めていきたいと考えています。

(中野敦)

中国語教育取り組み校経験交流会を実施

全員が話した聞いた3時間

TJFは2008年度から、国内の中国語教育取り組み校の責任者を



出された課題に対して、他のグループから感想や解決策が書き込まれた。



生徒の意欲向上、教員の確保、交流の機会の創出など多岐にわたって活発な意見交換を行なった。

中国に派遣する事業を行っています。派遣中、参加者間で中国語教育に関するさまざまな情報が交換されます。こうした情報を、中国語教育に取り組むより多くの学校の責任者に共有してほしいと考え、「中国語教育取り組み校経験交流会」を企画、実施しました。

12月15日(土)、会場となった講談社の会議室には、東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城、岐阜、岡山から校長や教頭、外国語科や国際交流の担当主任の方々22名が集まりました。

交流をより実り多いものにするために、ワークショップスタイルで交流会を進めました。まず、5グループに分かれて、各参加者が成功体験や抱えている課題をポストイットに書き出し、模造紙に貼りながら一人ひとり話をしました。TJFの中国語教育事業の強力なサポーターである在日中国大使館教育処の職員2人も参加者として、グループに入りました。休憩後にグループを組み替え、グループごとに模造紙に貼られたポストイットを見て回りながら、課題や解決策を全員で共有しました。

参加してよかった

交流会の冒頭で、自校の中国語の取り組み状況を発表した岐阜市立岐阜商業高等学校の校長は、「他の学校に比べて中国語の学習時間が多いことを知り、中国語教育を今まで以上に自校の特色ある取り組みとして積極的に情報発信していきたい」とメールで決意を新たにしてくれました。

「ふだん学校にいと、目の前の課題に追われがちだが、もっと先を見通した大きな視野が得られた。ほかの学校の先生方の話を聞く機会がなかったので、とても勉強になった」との感想も寄せられ、スタッフは大いに励まされました。

新事業の道筋が見えた

在日中国大使館教育処の職員からは、日中関係が冷え込んでいるこの時期に、中国語教育にこれだけ熱い思いをもつ校長がいることに感動し、TJFと連携して、中国の教育事情講座、中国文化体験

ワークショップ、教育処関係者との懇談会を実施してはどうかとの提案がありました。教育処の協力を得て中国語を開設していない学校の生徒のための「土曜中国語講座」を県単位で実施する可能性も見えてきました。

まさに、TJFがモットーとしている「であい、つながる」が具現した交流会になりました。
(長江春子)

2012年10月・11月・12月

ほかにこんな活動をしました

- 『国際文化フォーラム通信』no.96「解をつくりだす」を発行[10月]
- 日本情報発信サイト「くりっくにっぽん」をリニューアルオープン[日本語版:10月、英語版:11月、中国語版:12月]
- 高等学校中国語教育研究会各支部が開催する発表会を後援し、副賞の書籍(『中国の歴史』第1巻、陳暉臣著/講談社文庫)を寄贈[沖縄支部:10月/那覇、関東支部:11月/千葉、東海支部:11月/名古屋、関西支部:11月/大阪、北海道支部:12月/札幌、北陸支部:12月/石川、九州支部:12月/長崎]
- 高等学校韓国朝鮮語教育研修大阪大会(JAKEHS主催)を後援[11月/大阪]
- 「話してみよう韓国語」地方大会を後援し、各大会で優秀な成績を修めた高校生に副賞として図書券を寄贈[11月/大阪、12月/青森、熊本、愛媛、鹿児島、福岡、鳥取]
- 「日韓 中高生交流プログラム SEOULでダンス・ダンス・ダンス(ダンス・ダンス・ダンス)」(秀林文化財団・TJF共催)の選考(書類・面接)を行い参加者9名を決定[12月]
- 「中高校生のための韓国語講座2012」を駐日韓国大使館韓国文化院、同世宗学堂と共催[2012年5月~2013年3月、毎週土曜日/東京]

掲示板

『外国語学習のめやす』市販版を発行しました

TJFは2013年1月、『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』を発行し販売を開始しました。本書の元になったのは2012年3月に発行した『外国語学習のめやす2012』で、同年11月に5,000部の無償配付を終えました。その後も入手の希望が多く寄せられたため、市販版を刊行しました。



◆こんなに便利！

市販版では、「コミュニケーション能力指標」を本体から取り外して持ち歩けるようにしました(ブック・イン・ブック)。また、新たに15話題分野すべての指標を言語運用能力レベル別に縦覧できる一覧表を加えました。

◆税込みで1,000円(送料別)です。ご注文は下のウェブサイトから。

▶link.tjf.or.jp/meyasu

TJFが実施または協力する外国語教育関連のシンポジウム、セミナー、勉強会等のイベントの参加者には、会場にて税込み900円で販売します。販売予定も上記ウェブサイトでご確認ください。また、学会や研究会などの会場で販売をご希望される場合はTJFまでメールでご相談ください。

▶syuppan@tjf.or.jp

日本外国語教育推進機構がシンポジウムを開催します

昨年3月3日にTJFと上智大学が共催で開催したシンポジウム「未来(あす)を生きぬくための外国語教育に挑む」において、日本の外国語教育を変える方策の一つとして、外国語教育関係者の全国的ネットワーク組織の設立が提案されました。これが契機となり、2012年12月3日、「一般社団法人日本外国語

教育推進機構(JACTFL)」が誕生しました。

JACTFLは、外国語教育の重要性を国内外にアピールし、多言語・多文化が共生するグローバル社会に対応する多様な外国語教育を推進することを通じて、日本における外国語教育の質的向上と普及を図ることをめざしています。設立後初の事業として、さまざまな外国語教育の関係者が一堂に集まり、日本のこれからの外国語教育を考えるシンポジウム「外国語教育の未来(あす)を拓く」が以下のとおり開催されます。TJFもシンポジウムの開催に協力しています。

日時……………3月2日(土)10:00~17:30

会場……………上智大学四谷キャンパス、中央図書館棟9階会議室

参加費……………無料

主催……………上智大学国際言語情報研究所、
日本外国語教育推進機構(JACTFL)

特別協力……………公益財団法人かめのり財団、
公益財団法人国際文化フォーラム(TJF)

内容 ●午前……………基調講演「日本の外国語教育の未来を拓く」

スピーカー……………當作靖彦(カリフォルニア大学サンディエゴ校)
吉田研作(上智大学)

●午後……………パネルディスカッション「これからの外国語教育のあり方について」

パネリスト……………境一三(慶應義塾大学)
迫田久美子(国立国語研究所)
立花英裕(早稲田大学)
長谷川由起子(九州産業大学)
村上公一(早稲田大学)
森住衛(桜美林大学)

司会……………山崎吉朗(JACTFL) (五十音順、敬称略)

シンポジウムの詳細および申し込みはこちらをご覧ください。

▶www.jactfl.or.jp

国際文化フォーラム通信97号

2013年1月

発行人……………内藤裕之
編集人……………水口景子
アートディレクション……………鈴木一誌
デザイン+DTPオペレーション……………大河原哲
出力・印刷・製本……………凸版印刷(株)
校閲・校正……………天山舎
表紙写真……………大木茂
(ネパール、カトマンズ近郊のチベット仏教寺院で撮影)

公益財団法人 国際文化フォーラム

〒112-0013
東京都文京区音羽1-17-14
音羽YKビル3階
Phone: 03-5981-5226
Fax: 03-5981-5227
E-mail: forum@tjf.or.jp
www.tjf.or.jp

●昨年6月、より多くの人にTJFのミッションに共感し、活動に参画していただくために、コラボレーター制度を設けた。制度の名称を決めるにあたって複数の候補があがったが、「コラボレート」には、異なる立場の人が共同作業をする意味があることから、最終的にこの名称に決まった。すでにこの半年間に、通訳、翻訳チェック、アテンド、事業の広報などさまざまな場面で活躍してくれている。

●今回の特集で紹介した大学のゼミとの「コラボレーション(コラボ)」は、TJFにとって新しい挑戦だった。私も何度かゼミに足を運び、学生たちが自ら企画した「デコ」と「アイドル」をテーマにコンテンツをつくりあげる過程に立ち会う機会を得た。

●「中学時代や高校時代は、自分を主張したくて文具をデコっていたけれど、今はやらない」と聞いて、なるほどそういう気持ちなのかと感じ、「いたしゃもデコだよ」という発言に、「アメ車」世代の私は、イタリアの車がなぜデコなのか、頭のなかには「？」でいっぱいになった。車体に漫画やアニメ、ゲームに関連するキャラクターやメーカーのロゴをかたどったステッカーを貼り付けたり、塗装するなど装飾した自動車のことを「痛車」と呼ぶと知ったのは、話し合いがかなり進んでからだった。今、若い人たちの間で何が話題になっていて、それをどのように捉えているのかを知ることができた意味は小さくないと思う。

●「みんなの発想には毎回驚かされた。ゼミの後は脳みそ使ったー!」という気分になる。「自分がいかに

ステレオタイプだったかということに気づかされた。いろいろな日本を自分で見るようになって、日本が広くなった」。企画が決まり本格的な取材に入る前に、それまでを振り返ってもらったゼミ生のこうしたコメントから、「考える」ことが刺激され、思考力がパワーアップしたことが伝わってくる。

●「インタビュー相手に関わる分野について、もっと勉強しなければならないことがわかった」「相手をどれだけ知っているかによって、質問内容や相手の反応が変わってくる」。何かを聞くためには、相手のことをより広く深く知っておく必要があると気づいたようだ。

●私たちは「外国語学習のめやす」で、言語は社会活動と不可分であり、現実社会の文脈でこそ、効率的なことばの学びができると提案している。このことは決して言語の学びに限ったことではない。今回のコラボはまさにそのことが実感されるものだった。

●「コラボ」は、しばしば意外な組み合わせによって付加価値が創出されるという。演歌歌手とジャズ歌手の共演、自動車メーカーと家具メーカーによる自動車の開発など、「異色コラボ」が私たちのまわりに多数存在する。普通では想像できないような組み合わせが、化学反応を起こし、これまでにないものを創っていく。旧来の価値観にとらわれず新しいものをいっしょに創っていく「コラボ」の相手探しをこれからも続けていきたい。

水口景子

編集後記